



# 自然遊学館だより

2005 SUMMER



2005.07.11 発行  
貝塚市立自然遊学館

## ■行事レポート

- 「春のハイキング 水間から『たわわ』へ」…………… 1
- 「5月の海で遊ぼう なぎさの生きもの」…………… 2
- 「春の帰化植物」…………… 3
- 「二色の浜 海岸植物群落調査」…………… 4
- 「千石荘の昆虫採集」…………… 5
- 「第5 プールのヤゴ調べ」…………… 6
- 「二色浜稚魚放流」…………… 8
- 「干潟・プランクトン観察会」…………… 9

## ■いきものよみもの

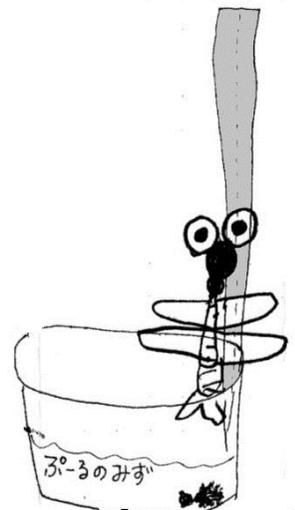
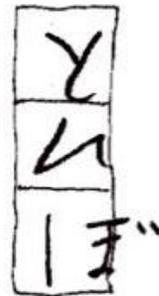
- 近木川で初記録のカニ  
台湾ヒライソモドキ(イワガニ科) …… 9
- ミミズじゃないよヒバカリだよ…………… 10

## ■【泉州生きもの歳時記】

- コアジサシ…………… 11
- アユ…………… 11

## ■投稿

- 自然生態園トンボの池に  
ホソミオツネントンボ! …………… 12
- マレーシア採集記…………… 13
- 寄贈標本の紹介…………… 14
- 遊学館スタッフ日誌…………… 15
- おしらせ…………… 16



No.36

## ■行事レポート

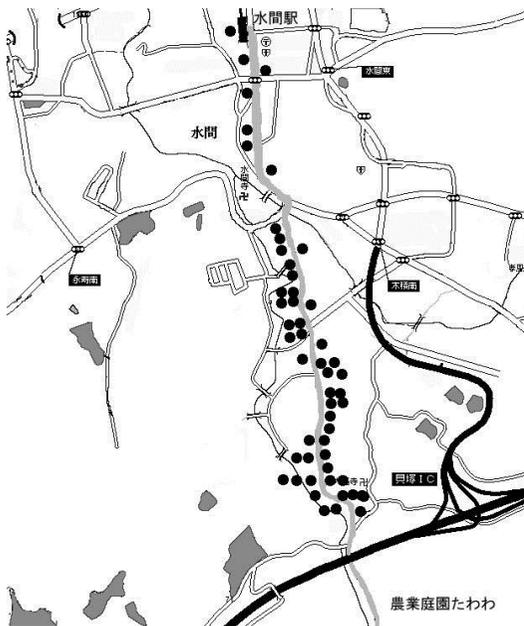
### 春のハイキング 水間から「たわわ」へ

場所：水間～馬場

日時：2005年4月23日(土) 10:00～15:00

参加者 25名

水間鉄道「水間」駅から農業庭園「たわわ」までは、立派な軒のある古いお家が多い。ツバメの巣を数えながら行こう！ということになったが、家は道の両側にあるし、車が通るし、1軒に2,3個もあつたりして、おしまいのほうは面倒になるほど。巣は52個（作りかけを含む）あつた。



当日のルートとツバメの巣

休耕田一面に生えたスズメノテッポウの花茎を引き抜き、笛を作ったけれど、なかなか鳴らない。いつになっても道草は楽しい。

たわわの小さい池は、縁に泥が積み上げられ湿地の部分がなくなっていた。西澤さんが池の中の黒い塊を見つけた。どうやら小さい生きものが集まっているみたい。「オタマジャクシが団子になっている！」真っ黒で1.5cmぐらいで足が生えている。それなら、ウシガエルではなくヒキガエルと分かって、感動。カエルになったら山へ移動して大きくなるらしい。



オタマジャクシがいっぱい！



小さなヒキガエルになりました

(5月4日撮影)

池周辺の植物は、キランソウ・カンサイタンポポ・ミミナグサ・ハハコグサなど由来のものには名札をつけて名前を覚えてもらい、セイトカアワダチソウなどの帰化植物を抜き、懐かしい風景を取り戻す計画です。



ホソミオツネトンボも観察しました

(白木 江都子)

二色浜南端は砂浜と石積み護岸の環境で、浅瀬にはたくさんの海藻の切れ端がありました。海藻を水の張ったバットで振ると、尺取虫のような動きをするワレカラ類や鮮やかな緑色をしたニッポンモバヨコエビが見つかり、小さな生き物の世界に興味を抱いたようでした。この場所で観察されたものは動物 35 種、海藻 12 種でした。



鮮やかな緑色をしたニッポンモバヨコエビ

## 5月の海で遊ぼう なぎさの生きもの

場所：近木川河口、二色浜

日時：2005年5月7日(土) 10:00~15:00

参加者 43名

春から初夏にかけての海辺は、昼間に最干潮を迎え、特に大潮時の潮のひいた二色浜の浜辺では、多くの方が潮干狩りを楽しみます。この日も正午頃が最干潮だったので、午前中は二色浜南端で観察している間に波打ち際がだんだんと沖合いに後退し、午後には観察場所を移した近木川河口で徐々に潮が差してくる満ちひきの様子が実感できました。

講師に貝類をご専門とされる児嶋格さんと大阪府水産試験場の鍋島靖信さんをお呼びし、参加者の採集してきた生きものの解説をして頂きました。

近木川河口の方は、左岸の海に面した砂礫まじりの干潟で、河川水と海水が混じりあう汽水環境です。この日は川から流されてきたのか、「オナガウジ」と呼ばれるハナアブ科の幼虫がたくさん見られました。ここでは動物 23 種、海藻 1 種が観察されました。

次頁の表に観察された生きもののリストを示します。



この浜にはどんな生きものがあるのかな

表. 観察会で記録された生物リスト

【動物】			二色浜南郷	近木川河口
刺胞動物門	花虫綱	イソギンチャク目	タテジマイソギンチャク	○ ○
軟体動物門	腹足綱	ケハダヒザラガイ科	ヒメケハダヒザラガイ	○ ○
		ウスヒザラガイ科	ヤスリヒザラガイ	○ ○
		ヨメガカサガイ科	ヨメガカサガイ	○ ○
		タマキビ科	タマキビガイ	○ ○
		ユキノカサガイ科	コウダカアオガイ	○ ○
			コモレビコガモガイ	○ ○
		ニシキウスガイ科	イシダタミガイ	○ ○
			コシダカガングラ	○ ○
		アツキガイ科	イボニシ	○ ○
		オリエイヨフバイ科	アラムシロガイ	○ ○
		トウガタガイ科	カキウラクチキレモドキ	○ ○
		カハバガサガイ科	シマメノウフネガイ	○ ○
			カラマツガイ	○ ○
二枚貝綱	マルスダレガイ科	アサリ	○ ○	
		フネガイ科	サルボウガイ	○ ○
		ハカガイ科	ハカガイ	○ ○
		イタボガキ科	マガキ	○ ○
	ケガキ	○ ○		
	イガイ科	ムラサキイガイ	○ ○	
		ホトギスガイ	○ ○	
環形動物門	多毛綱	ケヤリムシ目	カンザシゴカイ科の1種	○ ○
		ナナテイソム科	スゴカイイソム	○ ○
		ミスヒキゴカイ科	ミスヒキゴカイ	○ ○
	イソム科	イワムシ	○ ○	
節足動物門	頭脚綱	まん脚下肢	タテジマフジツボ	○ ○
			サンカクフジツボ	○ ○
			ヨーロッパフジツボ	○ ○
				○ ○
	軟甲綱	等脚目	フナムシ	○ ○
			イソコツブムシ	○ ○
		端脚目	ニッポンモバヨコエビ	○ ○
			マルエラワレカラ	○ ○
			トゲウレカラ	○ ○
		ホンヤドカリ科	ユビナガホンヤドカリ	○ ○
			ケアシホンヤドカリ	○ ○
		ヤドカリ科	テナガツノヤドカリ	○ ○
		テナガエビ科	スジエビモドキ	○ ○
		イワガニ科	モクスガニ	○ ○
			イソガニ	○ ○
			ヒライソガニ	○ ○
			ケフサイソガニ	○ ○
ガザミ科	チチュウカイミドリガニ	○ ○		
クモガニ科	ヨツハマガニ	○ ○		
スナガニ科	コメツキガニ	○ ○		
昆虫綱	ハエ目	ハナアブ科の幼虫	○ ○	
棘皮動物門	ヒトデ綱	ヒメヒトデ目	イトマキヒトデ	○ ○
脊索動物門	ホヤ綱	マボヤ目	イタボヤ科の1種	○ ○
				○ ○
硬骨魚綱	ハゼ科	カレイ科	ヒメハゼ	○ ○
			イシガレイ(幼)	○ ○
爬虫綱	ハタゲールカメ科		クサガメ(幼)	○ ○
			ヌマガメ科	ミシシッピーアカミミガメ(幼)
【植物】				
海藻	緑藻綱	アオサ科	アナアオサ	○ ○
			ウスバアオサ	○ ○
			ボタンアオサ	○ ○
褐藻綱	ホンダワラ科		タマノハキモク	○ ○
			ツノマタ	○ ○
紅藻綱	スギノリ科		ツノマタ	○ ○
		オゴノリ科	オゴノリ	○ ○
			カバノリ	○ ○
ムカデノリ科			ムカデノリ	○ ○
			ツルツル	○ ○
マサゴシバリ科			タオヤギソウ	○ ○
オキツノリ科			オキツノリ	○ ○
ワツナギソウ科			コスジフシツナギ	○ ○

## 春の帰化植物

場所：近木川河口 永久橋川原

日時：2005年5月14日(土) 14:00~16:00

参加者 17名

川原の帰化植物は、種類数が少なく数が多いので、初心者が身近な植物の名前を覚えるには適している、と思う。

近木川下流 永久橋の下は、土砂が堆積して陸化し、川原の植物は、水をかぶることがない。水に強いヨシはその性質を生かせず、帰化植物に負けて今や潰滅状態、昨年の秋は「ヨシ原で遊ぼう」という恒例行事が、嫌われもの「アレチウリ」に川原を占領され、実施できなかった。

イヌムギやカモジグサやオオオナモミが繁茂する中で、小さなオギ群落やソクズとハッカがかりうじて残っていたことに少しほっとした。ノビルの根っこを掘り、今夜のてんぷらに一品加えようとお土産にした。



昨秋アレチウリに占領された  
近木川永久橋付近

(山田 浩二)

永久橋川原で観察された植物

植物名	科名	帰化植物
カラスノエンドウ	まめ科	
クズ	まめ科	
ヨモギ	きく科	
セイタカアワダチソウ	きく科	○
ノゲシ	きく科	
オオオナモミ	きく科	○
ボタンツル	きんぼうげ科	
ウシハコベ	なでしこ科	史前帰化植物
ヨウシュヤマゴボウ	やまごぼう科	○
ソクズ(クサニワトコ)	すいかずら科	
アレチウリ	うり科	○
ハッカ	しそ科	
オヤブジラミ	せり科	
セリ	せり科	
ヤブガラシ	ぶどう科	
スイバ	たで科	
ギンギン	たで科	
カラムシ	いらくさ科	
イヌカキネガラシ	あぶらな科	
ヤエムグラ	あかね科	
ノビル	ゆり科	
ノハカタカラクサ	つゆくさ科	○
イヌムギ	いね科	
ネズミホソムギ	いね科	○
ヒメコバンソウ	いね科	○
カモジグサ	いね科	
カモガヤ	いね科	○
オギ	いね科	
ヨシ	いね科	

(白木 江都子・湯浅 幸子)

次に、同じ順序で歩きなおし、群落の優占種や各植物の分布状況を見、調査票に書き込んでゆく作業をした。

二色浜海岸の利用者は極めて多く、利用目的も多岐にわたり、海岸植物を保護するには難しい状況であるにもかかわらず、海岸植物小群落は数多く形成されている。今回の調査時にホコガタアカザが数株、また「貝塚の植物」(1982)に記載された後見られなくなったハマゴウ(大阪府レッドデータブック絶滅危惧Ⅱ類)も1株見つけた。

大阪府二色浜公園事務所が、3,4年前、「海浜植物養生中」と看板を立てロープで囲って海岸植物の保護を始め、それっきりになっているが、ハマボウフウ・ハマヒルガオ・コウボウムギ・コウボウシバなどはその中で細々と群落をなしている。

二色の浜 海岸植物群落調査

場所：二色の浜

日時：2005年5月22日(日) 10:00～15:00

参加者 13名

現在、市民参加で行われている全国の海岸植物群落調査を二色浜で実施した。

曇り空、たまに雨がぱらつくような、海岸の調査にはうってつけの天候の下、上久保文貴前館長を講師にお迎えして、砂浜の陸側、海岸中央部、波打ち際近くと歩きながら、出現する植物を同定記録し、二色浜にどのような植物が生育しているかの全体像をつかんだ。(この作業、実は5月2日にも上久保・白木・湯浅で実施している)

<調査結果の一部>

海浜植物優占群落

- ①コウボウシバ②コウボウムギ③ハマヒルガオ④シロバナマンテマ⑤ネズミホソムギ⑥コマツヨイグサ⑦アレチマツヨイグサ⑧シロバナシナガワハギ⑨ツルナ⑩ハマボウフウ

内陸植物優占群落

- ①ネズミホソムギ②コマツヨイグサ③ヨモギ④シロバナマンテマ⑤ツルナ⑥コメツブウマゴヤシ⑦シロバナシナガワハギ⑧オカヒジキ⑨ハマヒルガオ⑩ハマダイコン

内陸植物のみの群落

- ①ネズミホソムギ②ギョウギシバ③シロバナマンテマ④コマツヨイグサ⑤コメツブウマゴヤシ⑥ヨモギ⑦ハマスゲ⑧ヘラオオバコ⑨マメグンバイナズナ⑩シロツメクサ

(白木 江都子・湯浅 幸子)

## 千石荘の昆虫採集

場所：名越千石荘

日時：2005年5月28日(土) 10:00~15:00

参加者 55名

人里近くの雑木林、ため池、水田、草地、湿地などを含む環境を「里山」、あるいは「里地」と言います。貝塚市内の他の「里山」的環境では、宅地開発や農業庭園のための人為的な造成が行われ、多くの動植物の生息場所が奪われています。そのような状況の中、千石荘の自然は、貝塚市にとって、以前にも増して重要なものになっています。今回の行事は、そういった里山の自然の中で、どのような昆虫が生息しているのか確認するために行いました。

バス停のあるロータリーに集合し、雑木林の中にある牛神池とボタン池のほりを抜け、大阪市立少年保養所に至るコースを取りました。5月21日の下見の時には、牛神池のほとりの樹液が出ているクヌギで、コクワガタやハチモドキハナアブを確認していたのに、当日は観察されず、不安なスタートになったのですが、結局、終了までに8名がコクワガタを採集し、谷川君は、ヒラタクワガタを採集しました。

また、牛神池周辺で、窪田君が、大阪府レッドデータブックで準絶滅危惧種に指定されているベニイトトンボを採集しました。コシアキトンボやオオシオカラトンボ、テングチョウやアサマイチモンジといった飛び回って目立つ昆虫のほかにも、ヒゲジロハサミムシやヤコンオサムシのような地面にいる

昆虫、カシワマイマイ幼虫やハラビロカマキリ卵囊といった草木に付いている昆虫も、次々に採集されました。最後に各自が採集したものをみんなの前で発表し、飼育しない昆虫を逃がして、行事を終えました。



### 何がいるのかな？

(左端で昆虫の説明をしているのが、大阪府大でハナカメムシの分類を研究している山田量崇さんです)

以下に、行事当日と下見の際に確認された種のリスト、および若干のコメントを記します。ステージを記していないものは成虫での確認を示しています。

### 5月28日(行事)

アオイトトンボ、モノサシトンボ、ベニイトトンボ(準絶滅危惧種)、コシアキトンボ、シオカラトンボ、オオシオカラトンボ、ヤブキリ幼虫、キリギリス幼虫、ツチイナゴ、カマドウマ科の一種の幼虫、ハラヒシバツタ、オオカマキリ幼虫、ハラビロカマキリ卵囊(ヒメアリの襲撃を受けていた)、ヤマトシロアリ(朽木内)、ヒゲジロハサミムシ(朽木内)、セイタカアワダチソウヒゲナガアブラムシ、ヨコヅナサシガメ、アワダチソウグンバイ、ヒメホシカメムシ、ホシハラビロヘリカメムシ、ハリカメムシ、ヤコンオサム

シ、コアオハナムグリ、マメコガネ、ヒラタクワガタ、コクワガタ、ヒゲコメツキ、ヨツボシケシキスイ（樹液）、ナミテントウ、ナナホシテントウ、ベニカミキリ、クロウリハムシ、オジロアシナガゾウムシ、ナミアゲハ、キチョウ、スジグロシロチョウ、モンシロチョウ、サトキマダラヒカゲ、クロヒカゲ、ヒメウラナミジャノメ、クロコノマチョウ、アサマイチモンジ、テングチョウ、ウラギンシジミ、タケカレハ幼虫、カシワマイマイ幼虫、トビイロケアリ、ハリブトシリアゲアリ

### 5月21日（下見）

コシアキトンボ、オオシオカラトンボ、キリギリス幼虫、ヒメギス幼虫、ツチイナゴ、オオカマキリ幼虫、セイタカアワダチソウヒゲナガアブラムシ、アワダチソウグンバイ、シマサシガメ、ヨコヅナサシガメ、ケバカキベリナガカスミカメ、シロヘリカメムシ、ホシハラビロヘリカメムシ、コクワガタ（樹液）、ナガコゲチャケシキスイ（樹液）、ヨツボシケシキスイ（樹液）、ルイスコオニケシキスイ（樹液）、ジョウカイボン、セボシジョウカイ、ナミテントウ、ナナホシテントウ、ヒメカメノコテントウ、ヒメキバネサルハムシ、クロウリハムシ、コカシワクチブトゾウムシ、ベッコウガガンボ、エノキトガリタマバエ（虫えい名：エノキハトガリタマフシ）、ハチモドキハナアブ、ホシアシナガヤセバエ（樹液）、アオスジアゲハ、クロアゲハ、ナミアゲハ、モンシロチョウ、モンキチョウ、ヒメウラナミジャノメ、サトキマダラヒカゲ、クロコノマチョウ、コムシジ、キタテハ、ルリタテハ、アサマイチモンジ、テングチョウ、トビイロトラガ、ルリチュウレンジ、オナガアシブトコバチ、キアシナガバチ、クロヤマアリ、クロオオアリ、ウメマツオオアリ、ハリブトシリアゲアリ、クサアリモドキ、トビイロシワアリ、トビイロケアリ

## 第5 プールのヤゴ調べ

場所：貝塚市営第5プール（二色）

日時：2005年6月4日（土）10:00～12:00

参加者 122名

自然遊学館では、2001年から貝塚市営第5プールにおいて、水抜き作業が行われるこの時期に、プールのヤゴ調べの行事を行ってきました。この行事の第1の目的は、水が抜かれて下水に流される前に、羽化間際のヤゴを救い出して、家に持ち帰って、無事に羽化させることです。

今年も100名を越える参加者が網を手にして50mプールに入り、30分間採集し、シオカラトンボ、コノシメトンボ、タイリクアカネ、ウスバキトンボ、ショウジョウトンボ、ギンヤンマ、アオモンイトトンボの7種、合計911個体のヤゴを採集しました。水生昆虫の生態を研究している大阪府大院・農・昆虫の向井康夫さんの話では、終齢サイズでない「シオカラトンボ」のヤゴ（1個体）は、もしかしたらオオシオカラトンボかシオヤトンボである可能性があるということでした。



（岩崎 拓）

メス成虫が水面に卵を産む落とすトンボ科の5種はいいのですが、水草に卵を産み付けるタイプのギンヤンマとアオモンイトトンボが、どうやって水草のないプールに産卵したのか、疑問は解決できないままです。

採集されたヤゴを、家族ごとに同定・カウントし、最後に、ヤゴの飼育方法、同定、トンボの生活史、食性、産卵などの説明をして、行事を終えました。

第5プールでの行事の他に、今年も、市内

の他の4箇所のプールで、地元の小学生といっしょにヤゴ調べを行いました。それは、ヤゴを救い出すという目的もありますし、貝塚市内のどのあたりにどのような種類のトンボが生息しているのかを調べる意味もあります。毎年、どのプールで、何種いたのか、何匹いたのか、というデータを取り続けることで、周囲の環境がどう変わっているのか判断できるかもしれません。下の表は、各プールで確認された水生昆虫のリストです。

表. 貝塚市内の市営プールのヤゴ調査 (2005年)

数値はヤゴの個体数、○は採集されたことを示す。第5プールの幼児用では、ヤゴの個体数を数えなかった。

アカネ属に関しては、現地では種までの同定を行わず、一定数を無作為に取り出し、自然遊学館に持ち帰って顕微鏡下で同定し、一部の個体は成虫まで飼育して種を確認した。

第3プールの調査は、当日の雨のため児童の参加は見送り、先生と自然遊学館スタッフが採集したヤゴを持ち帰って、児童に育ててもらった。

			第1プール		第2プール		第3プール		第4プール		第5プール	
場所			園中		堀		三ツ松		橋本		二色	
地名			20m		14m		87m		29m		4m	
標高			大人用 幼児用		大人用 幼児用		大人用 幼児用		大人用 幼児用		大人用 幼児用	
日付			5月30日		5月30日		6月2日		6月3日		6月4日	
調査者			西小学校 3年生		東小学校 4年生		葛城小学校 (先生)		南小学校 希望者		自然遊学館 行事	
人数			128		1		115		4		120	
時間			30分		10分		30分		30分		30分	
目	科	属・種										
トンボ目	トンボ科	シオカラトンボ	幼虫	7		4		29	78			○
		アカネ属	幼虫	2339	26	90	237	145	168			○
		ウスバキトンボ	幼虫		6	503		167	212			○
		ギンヤンマ	幼虫									○
												○
カゲロウ目	カゲロウ科	フタバカゲロウ属	幼虫	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		属不明	幼虫									○
カメムシ目	マツモムシ科	マツモムシ	幼虫		○	○	○	○	○	○	○	○
		コマツモムシ	幼虫・成虫	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ミズムシ科	ミズムシ科	コムズムシ属	幼虫・成虫	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		オオミズムシ	成虫				○					○
		チビミズムシ属	幼虫・成虫									○
		アメンボ	成虫	○		○		○	○	○	○	○
		ヒメアメンボ	成虫	○								○
	属不明	幼虫	○								○	
ハエ目	ユスリカ科	属不明	幼虫	○	○	○	○	○	○	○	○	
コウチュウ目	ガムシ科	ヒメガムシ	成虫				○					
		トゲバゴマフガムシ	成虫				○					
		シジミガムシ	成虫					○				
		ゲンゴロウ科	ハイロゲンゴロウ	成虫					○			

第1プール(大人用)のアカネ属は、タイリクアカネとコノシメトンボ(個体数の比率11:19)。

第1プール(幼児用)のアカネ属は、タイリクアカネ4個体、コノシメトンボ18個体、ノシメトンボ個体(実数)。

第2プール(大人用)のアカネ属は、コノシメトンボ(サンプル数16)。

第3プール(幼児用)のアカネ属は、タイリクアカネとコノシメトンボ(個体数の比率1:24)。

第4プールは大人用、幼児用とも、サンプルを自然遊学館に持ち帰らなかった。

第5プール(大人用)のアカネ属は、タイリクアカネとコノシメトンボ(個体数の比率4:21)。

トゲバゴマフガムシ、シジミガムシ、オオミズムシ、および第5プールのヤゴ以外の同定は向井康夫(大阪府大院・農・昆虫)による。

私たち人間はこれまでに、川やため池の水を汚したり、あるいは岸をコンクリートで固めたり、ため池を埋め立てたりして、どんどんトンボたちがすむ場所を奪ってきました。トンボの母親は、プールの水面を見て、産卵できる場所が見つかってよかったと、ほっとしたことだと思いますが、自分の子どもたちが下水に流されてしまう運命にあることは知る由もありません。本来の産卵場所を奪われた上に、プールに産卵した自分の子どもたちが下水に流されて殺されてしまっは、トンボにとっては踏んだり蹴ったりです。

行事の後、遊学館の多目的室で飼育していたヤゴは次々に成虫になり、飛び立っていきました。また、数人の方から「トンボが成虫になりました」という報告をいただきました。今回の行事がせめてもの罪滅ぼしになれば幸いです。

(岩崎 拓)

## 二色浜稚魚放流

場所： 二色浜マスト前

日時： 2005年6月4日(土) 10:00~12:00

参加者 84名

たくさんのお魚が住む大阪湾を願い、毎年恒例になっている稚魚放流。今年は大阪府水産試験場で新しく栽培対象魚になったホシガレイの稚魚 3千匹を試験場の睦谷一馬さんに運んできて頂きました。この魚は約30年前に大阪湾から姿を消し、全国的にも漁獲量が激減している幻のカレイです。大きな

ると60cm、4kgに達し、寿司ネタとして人気が高い高級魚です。



幻のカレイ、ホシガレイの幼魚

参加者は各自のバケツに数匹の稚魚を入れてもらい、波打ち際まで来て放流しました。幻のカレイとあって注目度が高いのか、民報各社のテレビ撮りが入り、稚魚放流の様子がその日の夕方のニュースとして放映されました。



大海原でたくましく育てね!

(山田 浩二)

## 干潟・プランクトン観察会

場所： 近木川河口、自然遊学館多目的室  
日時： 2005年6月25日(土) 13:30~16:30  
参加者 19名

阪南理科教育研究会に所属する小・中学校の先生を対象に近木川河口で見られるプランクトンの観察会が行われました。講師に滋賀県立大学環境科学部の後藤直成さんを迎え、プランクトンの採集から顕微鏡観察の実習を行いました。

はじめに多目的室で、干潟における底生微小藻類の働きや干潟の物質循環などについて解説をして頂きました。その後、近木川河口に行き、干潟の底泥を藁さじですくい取って、底生微小藻類(付着藻類)を採取しました。たまたま近木川河口では珍しいマメコブシガニを捕まえた方もいました。

続いて突堤の先端まで行き、プランクトンネットを用いて動・植物プランクトンの採取を行いました。この日はピンク色をした赤潮の帯がうっすらと海面上に見てとれました。



底生微小藻類の採取

採取した底生微小藻類と動・植物プランクトンは多目的室に持ち帰り、光学顕微鏡で観察しました。干潟底泥の表面に優占して繁茂する付着珪藻や海中に漂う様々な動・植物プランクトンを確認することができました。

(山田 浩二)

## ■いきものよみもの

### 近木川で初記録のカニ(1)

#### タイワンヒライソモドキ(イワガニ科)

2005年5月15日、府道大阪臨海線の高架下付近にあたる礫底の浅瀬で、近木川初記録となるイワガニ科のタイワンヒライソモドキ *Ptychognathus ishii* が3個体採集されました。この場所は昨年からの定期的な岩崎拓さんと水生生物の調査を行っている場所で、汽水域にあたります。礫にはスジアオノリが生え、多くのイシマキガイとこの貝が産み付けた卵のうを確認しました。児嶋先生の話では、実はこのイシマキガイも近木川では初記録ということでした。

本種は台湾や石垣島、与論島など南西諸島及び和歌山県より記録されている南方系のカニです。最近になって、大阪湾南部沿岸の小河川でも記録されていますが、今回、採集した近木川は分布の北限記録になります。また、国内の干潟に生息する底生生物の現状をまとめたWWF JAPANサイエンスレポートにおいて「希少種」と評価されています。



台湾ヒライソモドキ (♂, 甲幅 8.2mm)

上図の採集個体以外の計測値

- ・ ♂, 甲幅 6.6mm
- ・ ♀, 甲幅 10.1mm

(山田 浩二)

## ミミズじゃないよヒバカリだよ

5月30日、豊田陽平くん、豊田篤志くん、増田英くんが、自然遊学館にちいさなへびを持ってきました。5月29日の朝7時ころ、見出川橋周辺で遊んでいたら、丸太の下に隠れているのを発見したもので、あまりの小ささに、最初はミミズかと思ったそうです。体長およそ15cmのこのへびは、ヒバカリ *Amphiesma vibakari vibakari* の幼蛇でした。くすんだ茶褐色の背中にクリーム色の腹、腹の両脇にならぶ黒い点線と、首の両脇の白線が特徴のへびです。地味な体色のせいか観察の記録はあまり多くなく、『大阪府レッドデータブック』では情報不足とされています。

自然遊学館には1999年7月に馬場地区で

採集されたもの【標本番号70】、2001年6月に柵谷地区で採集されたもの【標本番号69】があり、最近では2004年3月に蕎原箱谷で目撃されています(写真)。



ヒバカリ

(2004年5月23日貝塚市蕎原箱谷で撮影)

また、大阪市立自然史博物館には、1976年9月に近木川本谷で採集されたもの【標本番号OMNH R1364、OMNH R1365】、1977年10月23日に蕎原小学校西で採集されたもの【標本番号OMNH R1443】が收藏されています。このように貝塚市内では山手のほうに記録が多く、海にちかい沢地区での発見はめずらしい例です。

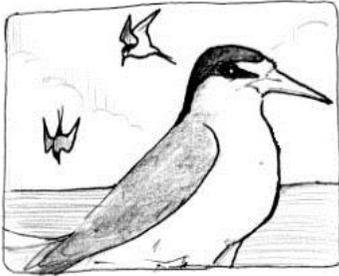
ヒバカリは小さなカエルやオタマジャクシ、小さな魚を食べて暮らしているため、水辺で観察されることの多いへびです。沢地区は工場や住宅街がほとんどで、わずかに残された水田はこのへびの暮らしを支えるにはあまりにも貧弱です。今回のヒバカリはここで繁殖したのでしょうか、それともどこからか流されてきたのでしょうか。真相はまだわかっていません。

(西澤 真樹子)

## 【泉州生きもの歳時記】

### コアジサシ 小鱗刺

近木川河口に 夏の使者「コアジサシ」がやって来ました。コアジサシはカモメの仲間、体は白く、帽子をかぶったように頭は黒い色をしています。嘴（くちばし）は黄色い色です。餌を採るときに水面へ飛び込む姿が鰯を刺しているように見えるため、鰯刺という名前がつけました。



コアジサシは夏鳥で、日本で夏の間、駐車場や砂浜などで繁殖します。二色浜でも 1994 年と、

1999 年に雛の姿が確認されました。千葉県では、巣立ち雛に足環がつけられています。千葉県で標識された雛が冬にフィリピンやマレーシアで確認されています。二色浜のコアジサシたちはどこで冬を越しているのでしょうか？そんなことに思いを馳せながら、コアジサシを眺めてみてはいかがでしょうか？

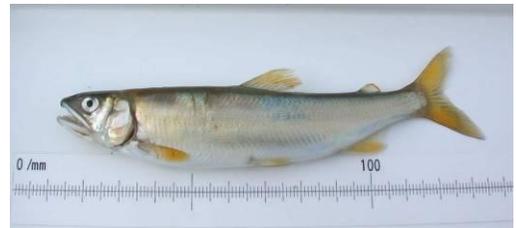
(宮本 久美子)

### アユ 鮎

「近木の流れは澄みわたり・・・」と貝塚市民歌にあるように、近木川はその昔“日根鮎川”とも呼ばれ、鮎が生息する美しい川だ

ったことが池田壺二著「近義郷畠中ものがたり」に記されています。ところが、2005 年 6 月 18 日空梅雨の暑さの中、岩崎拓さんと定期的に行う新井井堰下流での水生生物調査で、終了間際にタモ網を揺らしたのは紛れもない一匹の鮎でした。

鮎のおおよその生活史は、秋に卵からふ化した仔魚は海に下り、翌春まで幼魚期を海で過ごします。春になると川を遡上し、水生昆虫等を食べます。中流域に入ると川石に付着した藻類をもっぱら食べるようになり、縄張りを持って定住します。ちなみにアユの学名にある *Plecoglossus* は「ひだになった舌」を意味し、藻類を剥ぎ取って食べるのに都合のいい口の構造になっています。そしてまた秋を迎えると、下流に下り産卵を終え、その短い一生を終える年魚です。



近木川で採集されたアユ (全長 12.5cm)

採集した個体は近木川を遡上してきたものの、ここの堰を越えることができずにいたものと考えられます。近木川の水質が良くなることを願うのと同時に、アユをはじめウナギ、テナガエビ類が遡上しやすい魚道があれば、昔の近木川で見られたような、これらの種、本来の分布域を再び取り戻せるのではと思います。

(山田 浩二)

## ■投稿

### 自然生態園トンボの池に ホソミオツネントンボ！

4月9日、自然生態園の作業日、午前中の作業を終え昼食をすませたあと、前田悟くんが「トンボの池にザリガニがいる。お兄ちゃんたち（岡田恵太郎くんと鈴子勝也くん）、一緒にザリガニとって」と言ってきた。この一言がなければ、今回のトンボの発見はなかったかもしれない。

残っていた数人でトンボの池に行くと、石の間からザリガニが見えかくれ。子どもたちがザリガニつりをしているあいだ、大人たちは「トンボの池の水きれいになったね」とか「まだトンボいてないのかなあ？」と話していた。その時、前田三千代さんが「あっ、トンボがいる」と教えてくれた。いつものくせのようなもので、デジカメを持っていた私は「何かわからないものは、一応写しておく」と言って、そのトンボを写した。

イトトンボの仲間、トンボの池で見つかったのは、アオモンイトトンボとアオイトトンボの2種のみである。まだイトトンボの仲間が出てくる時期ではない。と考えると、あとは、オツネントンボかホソミオツネントンボといった成虫で越冬するものとは考えられない。でも、今までに貝塚市内で見つかったオツネントンボやホソミオツネントンボは、蕎原や馬場など丘陵地の池で見つかるが多かったため、今回、二色の市民の森にあるトンボの池で見つかったことは、ホ

ソミオツネントンボの移動範囲が広い(イトトンボの仲間としては)のか、それとも卵やヤゴの時期に何か(草など)についてきたのか、興味のあるところである。



自然生態園トンボの池に現れた  
ホソミオツネントンボのオス成虫  
(2005年4月9日撮影)

1997年につくられた自然生態園トンボの池でこれまでに確認された種は以下の17種だったので、今回のホソミオツネントンボは18種目ということになる。

幼虫と成虫の両方で確認されたトンボ11種  
アオイトトンボ、アオモンイトトンボ、ギンヤンマ、クロスジギンヤンマ、マルタンヤンマ、シオカラトンボ、ショウジョウトンボ、ノシメトンボ、タイリクアカネ、コノシメトンボ、ウスバキトンボ

幼虫のみで確認されたトンボ2種  
リスアカネ、ヨツボシトンボ

### 成虫のみで確認されたトンボ4種

ハラビロトンボ、アキアカネ、マイコアカネ、  
チョウトンボ

最後に、ホソミオツネントンボを見つけることができたのは、前田親子の活躍があったからです。また、画像でホソミオツネントンボの同定を確認していただいた井上清先生、中村進先生に紙面をかりて感謝いたします。ありがとうございました。

(自然遊学館わくわくクラブ 鈴子 佐幸)

### マレーシア採集記

5月6日から2週間、マレーシアへ昆虫採集に行ってきました。小さい頃テレビで、金緑色に輝くアトラスオオカブトや鳥のように大きいトリバネアゲハを見て、死ぬまでに一度は行ってみたいと思っていました。東南アジアの昆虫といえば、テレビや雑誌で取り上げられているカブトムシやクワガタのように大型で美しい昆虫というイメージがありますが、実はそんな虫たちはごくわずかで、ほとんどがまだ名前もついていないような新種の虫たちであふれかえっています。私のように昆虫の分類を研究している者にとってはまさに宝の山なのです。今回の旅行では、自分が研究しているカメムシの新種を採ることも目的のひとつとしていました。

初日から1週間ほど滞在したところは、首都クアラルンプールから北へ車で一時間行

ったゴンバツ溪谷 (Ulu Gombak) です。Malaya 大学の宿泊施設があり、そこでお世話になりました。すべてが初めてなので網に入った虫を次から次へと毒ビンに入れ、三角紙に包み、無我夢中で採りつづけました。

夕方になればバケツをひっくり返したようなものすごい豪雨の夕立が来ます。さすが東南アジアだと感じました。すごい湿気と気温の中、うっそうとした森に入ると手や腕、首筋に無数のヒルが。気づいたときには遅く、私の血を吸ったヒルは丸々と太ってどこかに行ってしまうました。さらに、ライトトラップの最中には、ヤミスズメというスズメバチの仲間に右目のまぶたと眉間を刺されました。ものすごい激痛でしたが一晩寝ると落ち着きます。そして、一番神経を使ったのが、マラリアとデング熱です。蚊が媒介して人の体内へと侵入するわけですが、私は日本から持ってきた蚊取り線香を常時炊いて防ぎました。日本の蚊取り線香が一番効き目が良いと聞いたからです。



エンダウ・ロンピン国立公園

こんな感じでマレーシアの洗礼を浴びつつも、最後の1週間を過ごしたエンダウ・ロンピン国立公園（Endau-Rompin）では、現地の人もめったに見たことがないというゾウにも出会えたり、マレーシア料理はかなりおいしかったし、現地の人たちはいい人たちばかりで、最高の2週間を過ごせました。肝心の虫はというと、大満足ではないにしろ良い獲物を採ることができました。種数はまだ分かりませんがカメムシだけで2000匹は採れました。もちろん新種もたくさんいます。一度行っただけではまだまだ満足し足りませんが、ますますマレーシアに、そして東南アジアに魅了されたといっても過言ではありません。

日本の自然もすばらしいですが、東南アジアの森の生物多様性は比べものになりません。機会があれば一度行ってみたいはいかがでしょうか。おすすめです。私ははまってしまいました。

(山田 量崇)

## ■寄贈標本の紹介

以下の方々より標本を寄贈していただきました。お礼申し上げます。

(※2005年6月分まで)

- ◆青柳正人さんより  
貝塚市蓄原本谷（標高 350m付近）  
カケス羽毛 11 点
- ◆KMさんより  
泉佐野市鶴原 4 丁目  
セアカゴケグモ♀2 点
- ◆鈴子佐幸さんより  
貝塚市蓄原東手川（標高 375m付近）  
ムカシトンボ羽化殻 1 点



(撮影：鈴子佐幸)

- ◆山口フミ子さんより  
貝塚市大川  
イタヤカミキリ♂成虫 1 点
- ◆浅井雅俊、浅井いずみさんより  
貝塚市二色  
オオムカデ 1 点
- ◆青柳正人さんより  
貝塚市木積畑上橋  
イタチ死体 1 点
- ◆青柳正人さんより  
貝塚市木積畑上橋  
オオムラサキ幼虫死体 1 点
- ◆高野晴一郎さんより  
アオムシコマユバチに寄生されたモンシロチョウ幼虫数個体
- ◆鈴子佐幸さんより  
近木川河口（採集日 2005 年 5 月 27 日）  
コブヨコバサミ 1 点 ※近木川初記録種

- ◆食野俊男さんより  
貝塚市木積  
タゴガエル 3 点  
自宅で産卵したオイカワの卵 (6 月 19 日)
- ◆上村真太郎さんより  
熊取町五門  
ホソヒョウタンゴミムシ 1 点
- ◆上村真太郎さんより  
近木川河口 (採集日 2005 年 6 月 4 日)  
ヨコヤアナジャコ 1 点
- ◆松山繁栄さんより  
貝塚市二色  
ワダトガリヒメバチ 2 点

## ■遊学館スタッフ日誌

5 月 11 日 千石荘の養護学校付近でナガサキアゲハを目撃したのですが、高所だったため捕虫網が届きませんでした。5 月 28 日に当館が実施した昆虫採集行事の際には、残念ながら目撃できませんでした。そして 6 月 7 日に、ボタン池のほとりでナガサキアゲハの死体を拾うこととなりました。頭部、胸部、前翅が残され、腹部と後翅がないのは、鳥が飛んでいるナガサキアゲハを襲ったのではなく、弱って地面に落下したものを獣(おそらくネコ)が食べたものだと考えられます。これが当館所蔵の貝塚市産ナガサキアゲハの 4 個体目の標本となりました。(岩崎)

5 月 30 日 市営第 1 プールで西小学校の皆さんとヤゴ調べを行いました。ヤゴ以外に

も、ユスリカの幼虫やカゲロウの幼虫、あるいはコミズムシやマツモムシの仲間も採集されました。一緒に採集している時に「ヤゴはコミズムシを食べるのですか」と質問されたのですが、答えに自信がなく、当館に帰ってヤゴにユスリカ幼虫、カゲロウ幼虫、コミズムシ成虫を餌として与える簡単な実験をしました。その結果、ヤゴはコミズムシ成虫も食べますが、食べ残した量から判断して、ユスリカ幼虫やカゲロウ幼虫ほど好きな餌ではないことが分かりました。(岩崎)

6 月 23 日 ここ毎年、近木川をフィールドに市内の各学校が総合学習に取り組んでいます。南小学校の 4 年生が中流の清見橋付近で生きもの採集をした時に、変わった魚が採れたとのことで、館に持って来てくれました。ウキゴリ(ハゼ科)です。近木川ではつい最近まで記録がなく、大阪府レッドデータブックにおいて「絶滅危惧Ⅱ類」に指定されている魚です。

近木川の生物相を調べる上で、子どもたちのパワーは欠かせませんね。

(山田 浩)

## ありがとう

・ 毎月第 2 土曜日の自然生態園作業日に、猛烈に働いてくださる大川内幸三さん、草刈鎌の切れなさに落胆し、1 本残らず家へ持って帰って研いでくださいました。

・ 第 5 プールヤゴ調べの行事が終了し、後片付けを手伝って下さっていた浅井真紀子

さん、自然遊学館の網がぼろぼろなのに驚いて、レザーでくるんだり、穴を埋めたりして、新品のように修繕して下さいました。

・サイクリング車で貝塚中を精力的に走り回り、貝塚の生きもの情報を集め届けてくださる食野<sup>めしの</sup>さん、6月10日、農業庭園「たわわ」の奥にササユリが7,8本咲いています、うれしい情報を寄せてくださいました。

・6月11日「千石荘の昆虫採集」は、申込者が50名をこえ、以後はお断りするというほどの人気でした。大阪市の許可を得て林の中を歩き回る行事ですが、いつものことながら自然遊学館わくわくクラブのお父さんお母さん、そしてジュニアの皆さんにも大変お世話になりました。

子どもたちは木の洞にクワガタの姿をめぐとく見つけます。そこで、小学校低学年の頃から「昆虫博士」と呼ばれていた岡田恵太郎君の登場です。彼はもう高校2年生ですが、ポケットからクワガタ採集用秘密兵器を数種出してきて、慣れた手つきで慎重にクワガタを穿り出します。その周りを、子どもたちが緊張の面持ちで取り囲みます。

帰る間際、筆者が作ったカラスノエンドウの豆笛が人気を呼び、参加者全員が、ブーブー、ビービーの音を求めて必死でした。よく太った豆は手近になく(時期的にもう遅い)、酒井陽子・智子さんが、それぞれポリ袋に集めていたカラスノエンドウを、気前よく配ってくれました。

(白木)

## ■おしらせ

### 夏休み自由研究相談

期間：8月1日(月)～8月29日(月)

月曜と金曜の午後1時～4時

申込み：事前に電話が必要 (FAXも可)

たくさん生きものとふれあえることのできる夏休み。この虫は？あの花は？素朴な疑問にお答えします。自然の不思議を体感することを旨とした自由研究のご相談お待ちしております。

### 写真展「近木川と子どもたち」

期間：2005年6月20日(月)～7月20日(水)

場所：自然遊学館多目的室

和泉葛城山を源として貝塚市のほぼ中央を流れる近木川は、平成5年と9年に、全国の二級河川の中で水質(BOD値)がワーストワンになりました。その後、生活排水実践活動や、近木っ子探検隊、環境学習、クリーンアップなどさまざまな取り組みの結果、最近のBOD値は、環境基準を下回るようになりました。

今回の写真展では、近木川をきれいな川に戻すために結成された「近木っ子探検隊」による活動、貝塚市内の小学校での総合学習、自然遊学館が近木川で行ってきた行事、子どもと大人の井戸端会議における子どもたちの様子や、四季それぞれの近木川の風景を、

約 120 点の写真やパネルで紹介します。

## 特別展「自然生態園」

期間:2005年7月30日(土)~9月25日(日)

場所:自然遊学館多目的室

1997年から3年かけて、のべ2000人のボランティアでつくった自然生態園。トンボの池・バッタの原っぱ・ドングリの森・海辺の植物ブロック。自然遊学館わくわくクラブの人たちが中心になって、草抜きやザリガニつりなど維持管理作業に精を出しています。自然生態園の8年間のあゆみを、写真・標本(トンボ・ヤゴ羽化殻)・生体展示で紹介します

## ホームページでも

### 『自然遊学館だより』が読めます

自然遊学館のホームページには、展示案内、利用案内、行事案内、調査研究、遊学館だより、貝塚の自然、市民の森、自然遊学館わくわくクラブ、更新履歴のページがあります。遊学館だよりのページでは、ホームページ開設以降の第26号から、本誌を再編集して掲載しています。ホームページ上では画像はカラーで、紙面の都合で本誌に掲載できなかった画像も公開しています。また、ホームページ開設以前に刊行された第1号(1994年5月)から第25号に関しても、主に生きものに関係した記事を抜粋して、掲載しています。ぜひご覧ください。また、貝塚の自然のペー

ジでは、当館スタッフが貝塚市内で撮影した動植物の画像を多数掲載しています。こちらをあわせてご覧ください。URLは(<http://www.city.kaizuka.lg.jp/shizen/index.htm>)です。

自然遊学館だより 2005 夏号 (No. 36)

貝塚市立自然遊学館

〒597-0091

大阪府貝塚市二色3丁目26-1

Tel. 0724 (31) 8457

Fax. 0724 (31) 8458

E-mail: [shizen@city.kaizuka.lg.jp](mailto:shizen@city.kaizuka.lg.jp)

<http://www.city.kaizuka.lg.jp/shizen/index.htm>

発行日 2005.7.11

この小冊子は市内印刷で作成しております。